

ふるさと再発見シリーズ3



ポロト湖物語

ポロト湖物語

目 次

はじめに	1
1 ポロト湖の自然的特徴	2
2 ポロト湖に暮らした先人～湖周辺の遺跡～	4
3 ポロト湖の観光利用	6
4 ポロト湖の産業と物産	8
5 ポロト湖と町政～式典の舞台として～	10
6 ポロト湖と博物館～文化伝承の拠点へ～	12
7 ポロト湖をめぐる主な出来事	15

はじめに

民族共生象徴空間の開設に向けて

2020年4月24日、ポロト湖畔に民族共生象徴空間が開設されます。先住民族アイヌについて、正しい認識と理解を促進するための国立アイヌ民族博物館と文化の継承や創造発展の拠点となる国立民族共生公園などからなる施設です。

民族共生象徴空間では、アイヌ文化の多角的な伝承や共有を目指し、町内外、国内外、そして大人から子供まで、国や世代の垣根を越えて、アイヌ民族の世界観や社会観を学ぶことができるようになります。

平成30年12月11日には、本町をはじめ、札幌市、室蘭市を会場に開設500日前イベントが催され、民族共生象徴空間の愛称や国立アイヌ民族博物館等のロゴマークが発表されました。愛称となった「ウポポイ」（おおぜいで歌うこと）は、3案の中からインターネット投票などによって選ばれました。

本誌の内容について

本誌では、民族共生象徴空間「ウポポイ」が開設されるポロト湖畔の地理や歴史などを紹介します。

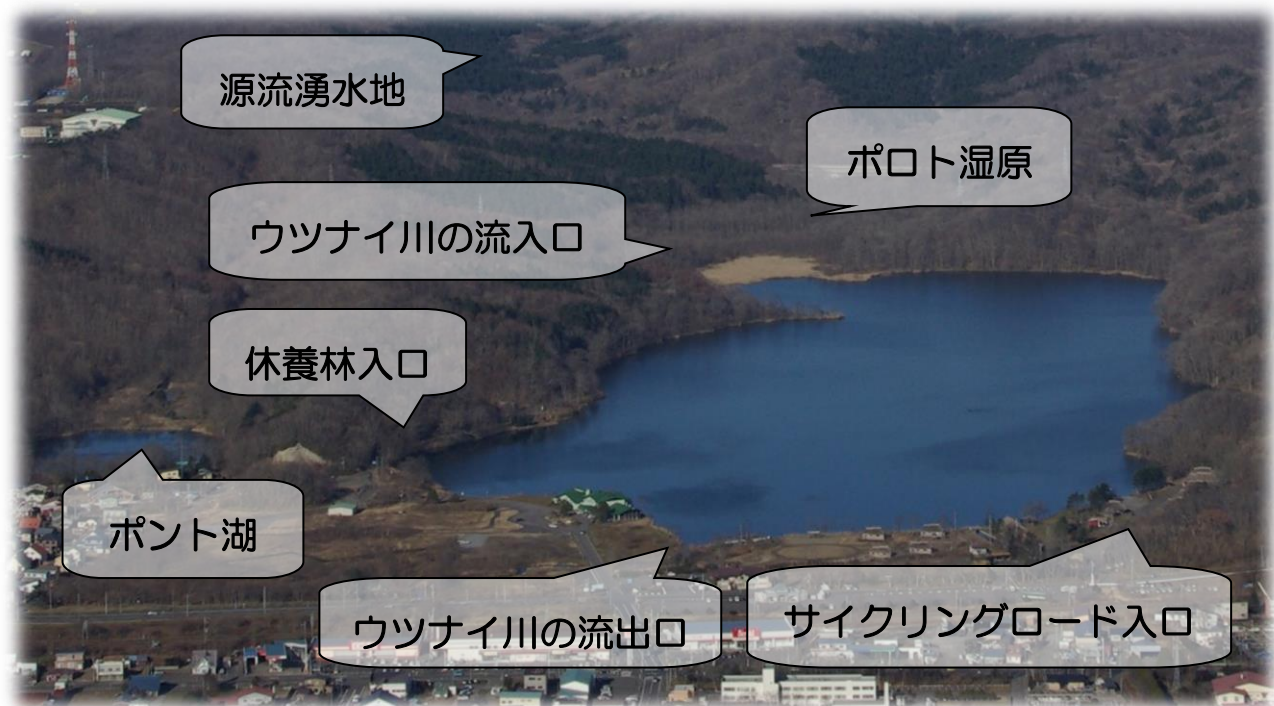
現在、ポロト湖周辺では5カ所に遺跡が発見されており、縄文時代からすでに人々の営みがあったことがわかっています。そして、以降7,000余年の間、歴史的にも文化・社会的にも多様な出来事が繰り広げられてきました。四季を通じた観光や町の節目を記念したイベントなど、いずれも白老の歩みとは切っても切れない関係にあります。そして今、新たな1ページが加えられようとしています。

本誌を通してポロト湖への理解が深められ、「ウポポイ」に関心を抱いていただければ幸いです。

1 ポロト湖の自然的特徴

ポロト湖のあれこれ

ポロト湖は、白老町の南東部に位置する淡水湖です。面積は約33ha、外周は約4kmで、湖の北側には湖の面積の約3分の2の面積に相当する湿地帯が形成され、ミズバショウの群生地として知られています。そこではハクチョウ、オジロワシ、カワセミなど140種余りの野鳥を観察でき、ヤマメやワカサギなど13種余りの淡水魚が生息しています。



ポロト湖へ流入流出する「ウツナイ川」は、上流部で40種余りの植物が自生する「ポロト休養林」を育み、下流部では400種余りの野草の宝庫である「ヨコスト湿原」へと流れ込みます。

また、湖の名前はアイヌ語の「大きい・湖」に由来し、西側に隣接するポント「小さい・湖」と対になっています。北海道内においては比較的ありふれたアイヌ語の地名ですが、他の地域では小さい湖が現在では消滅していたり、場所が特定できないことも多く、両方の湖が残る白老の景観はとても貴重なのです。

ポロト自然休養林

昭和 50 年に「ポロト自然休養林指定白老町促進期成会」が結成され、翌年には 395.65ha に及ぶ範囲が林野庁により指定を受けました。

クリ、ミズナラ、イタヤカエデ、ヤチダモ、ハンノキなどの天然林で構成され、クリ、ミズナラ、センノキなどは、80本近くの巨木が確認されています。最大直径は 192 cmを記録。北海道のお薦め国有林として、林野庁のホームページでも紹介されています。

白老町では国と協力しながら「レクリエーションの森」づくりに取り組み、遊歩道、キャンプ場、管理棟、車道舗装、案内看板、サイクリングロードなどをおよそ 10 年かけて整備しました。遊歩道は 1 kmから 2 kmまで 5 本のバリエーションを有し、最深部の「もみじ平」まで足を運べば、ポロト休養林の動植物を育む「ウツナイ川源流湧水地」を望めます。休養林に指定される以前に行われていた植林用の苗畑跡や水力発電施設跡を訪ねることもでき、ポロトの森と人々の繋がり歴史にも触れられます。



写真（上から）【ウツナイ源流湧水地】、【ミズナラの巨木】、【群生するミズバショウと浮橋】

2 ポロト湖に暮らした先人～湖周辺の遺跡～

白老の川と湿地帯の特徴

白老町内の河川の多くは、平地を大きく蛇行して流れていました。山あいから平地に出た河川は扇状に土砂を堆積させ、自らが運んだ土砂に行く手を遮られることで蛇行します。町のあちこちに残る湿地や三日月湖は、川が生き物のように流れを変えた名残です。

河口では川と海流がぶつかり合うことで堆積物が砂丘となります。内陸側ではヨコスト海岸のような湿地帯が作られ、町内では他にも同様の作用の痕跡を見つけることができます。しかし、湖として現存するのはポロト湖だけです。また、湖の周辺で発見された遺跡の誕生にも、こうした地形の変遷が大きく関係しています。

縄文時代の海岸線とポロト湖の形

およそ 7,500 年前頃をピークに、気温は現在より 1℃から 2℃も高かったといわれています。温暖化が進むことで海水面の上昇が危ぶまれていますが、当時は今より 5m ほど海水面が高く、海岸線は JR 室蘭本線の辺りにありました。

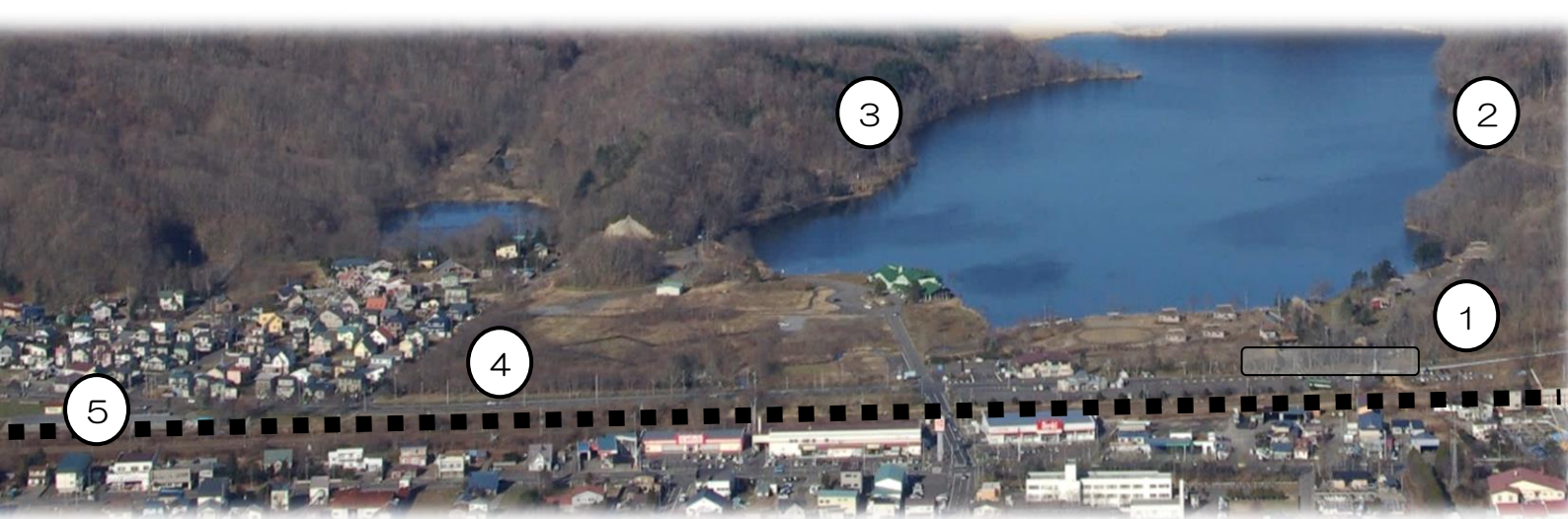
ポロト湖は海水と真水が混ざり合う^{せきこ}潟湖でした。海岸砂丘により流路が変わるだけでなく、山裾に広がる扇状地が水を貯めこむことで、白老を代表する湖の誕生に繋がりました。

当時の砂丘の一部を、現在もポロト湖の南岸に見ることができます。また、JR 室蘭本線の下にも、古い砂丘が埋もれています。

漁労を行うに利便性が高かった湖岸では、現在までに 5カ所の集落跡をはじめとする先人たちの痕跡が発見されており、太古から人々の営みが繰り返されてきたことを物語っています。



【旧アイヌ民族博物館の南側に残る砂丘列。写真左側の土手が縄文時代に形成された砂丘跡】



【ポロト湖と遺跡の相関図】

ポロト湖周辺の航空写真に遺跡の所在地を示しました。点線が JR 室蘭本線で、①から⑤の数字は遺跡として登録された地点です。四角く囲った範囲では、当時の砂丘の名残を見ることができます。

【各遺跡のプロフィール】

- ① 遺跡名：ポロト遺跡 発見年：昭和 55 年
時代：縄文中期（5,500 年前～4,500 年前）
備考：遺跡の本体は湖の東側の高台に位置します。民芸会館があった頃には、豪雨の後などに土器片などが拾えることで知られていました。
- ② 遺跡名：ポロト 1 遺跡 発見年：昭和 62 年
時代：縄文前期（7,000 年前～5,500 年前）
備考：湖東岸のほぼ中央部に位置します。12m から 20m ほど高台の緩い斜面上で発見されています。
- ③ 遺跡名：ポロト 2 遺跡 発見年：昭和 62 年
時代：縄文前期（7,000 年前～5,500 年前）
備考：湖西岸の斜面で発見されました。ポロト 1 遺跡と同じくらいの高さにつくられた遺跡です。
- ④ 遺跡名：ポロト 3 遺跡 発見年：平成 27 年
時代：縄文中期から晩期（5,500 年前～2,800 年前）
備考：民族共生象徴空間施工の事前調査で発見されました。
- ⑤ 遺跡名：ポロト 4 遺跡 発見年：平成 30 年
時代：縄文中期から後期（5,500 年前～3,300 年前）
備考：白老駅北商業施設整備工事の事前調査で発見されました。

3 ポロト湖の観光利用

ポロト観光のはじまり

白老町にとって観光資源の開発は長年の大きな課題でした。ポロト湖畔の景観を活かし、遊覧施設やレクリエーション施設を設ける構想は、昭和30年代前半から続けられていたのです。

36年3月、ポロト観光株式会社が湖西岸にボートの発着場を整え、ポロト荘を建設しました。落成祝賀会は、町長をはじめ関係者70人が出席する盛大なものでした。43年には湖南西部の低地帯にドライブインやレストランが、翌年には温泉が湧出したことに伴い「白老温泉ホテルポロト」が、それぞれオープンしました。30年代後半から40年代前半にかけて、湖畔ではハード・ソフトの両面で飛躍的に観光地化が進みました。

ポロト湖と観光祭り

昭和39年の町制10周年式典をきっかけに、翌年から観光まつりが湖畔をメイン会場に開催されるようになります。40年から4年間継続された祭典は、44年の町制15周年を節目に一部会場と内容の変更を加えながら、「白老どさんこまつり」へと引き継がれました。この展開は、ポロト湖畔を拠点として軌道に乗った白老観光を、町内広域へ波及させることを願ったことでした。

60年には歴史姉妹都市仙台市の七夕祭りを取り入れますが、花火大会やマラソン大会など、馴染みのイベントは湖畔を会場に催されました。閑散期の観光客誘致に加え、町民の健康促進の場やクマ送りなどアイヌ民族の儀礼を伝承する舞台となることも目指されまし、52年からは「冬まつり」も湖畔で行われました。



【観光祭りのボートレース（上）とどさんこ冬祭り（下）の一コマ】

ポロト湖のシンボル

○ SL ポロト号

昭和 51 年 9 月、D51-333 号が湖畔に設置されました。公募で愛称が決まった「ポロト号」は、14 年に製造された蒸気機関車で、室蘭本線、函館本線、夕張本線などで活躍。平成 20 年には白老駅北口広場へ移設されました。



○ コタンコロクル像

昭和 54 年 3 月に登場した「コタンコロクル像」は、高さ 16m、幅 7m の巨大な FRP 製の像です。もともとは竹浦のカーレース場サカタランドに建設されたものですが、観光協会など関係者の交渉により、湖畔への移設が実現しました。



【湖畔のポロト号（上）と博物館入口のコタンコロクル像（下）】

右手にイノウ（祭具）を持ち、左手をエムシ（太刀）に添えたその姿は、平成 30 年に撤去されるまでポロトコタンの発展や来訪者の安全を祈るシンボルとして親しまれました。

○ トーテムポール

昭和 54 年 4 月、白老観光商業協同組合が民芸会館前に建設しました。クマ、ワシ、フクロウを模った高さ 8.5m、直径 1.2m のトーテムポールは、以来約 40 年にわたり、ポロト湖畔への訪問者を迎えました。

4 ポロト湖の産業と物産

ポロト湖の恵み

ワカサギ釣り、スケート滑走、氷上バーベキュー……。

冬のポロト湖は、氷上アクティビティを楽しむ人たちで毎年賑わっていますが、しかし、現代社会では見る機会のなくなった産業が、冬のポロト湖の代名詞だった時代もあります。凍結した湖面を切り取る「採氷」です。



【凍結したポロト湖の採氷作業】

白老における採氷の歴史は古く、産業としては少なくとも明治34年まで遡ることができます。製氷機がないその時代、鮮魚の冷蔵用として流通していました。

北海道における採氷業の発祥は函館といわれています。白老の採氷業も当初は函館在住者との共同事業として着手されました。しかし、ポロト湖の氷が市場に現れると、瞬く間に品質の良さが注目されるようになります。また、36年の暖冬の影響で函館の採氷業が不調だったことも、ポロト湖産の氷への注目度を高めることに繋がりました。大正10年には採氷を行なう法人も登場し、製氷、採氷、貯蔵販売、物資保管を担い、白老内外の需要にっていました。

雪が少なく水質がよい白老の気候や環境とマッチしたポロト湖での採氷事業は、最盛期で年間1万tを出荷するなど大いに躍進しました。しかし、冷蔵庫や製氷機の普及とともに、昭和40年頃にその役割を終えました。

観光土産

白老における木彫りグマの始まりは、白老駅前にあった田辺商店といわれています。店主の田辺忍は、自ら“北海道木彫熊発祥の地”である八雲へ足を運び、木彫りグマ3個を購入しました。観光客を相手とした土産物が飛ぶように売れた大正期から戦前にかけて、アイヌらしさを彷彿とさせる土産物が人気を博すまで、長い時間はかからなかったようです。特に木彫りグマは、観光客がアイヌ民族に抱くイメージとも重なって、その定着を支えました。

昭和40年、湖畔の観光施設では様々な種類の木彫り作品などを扱う土産品店が軒を連ねるようになりました。

49年には土産品店が共同で「白老観光商業協同組合」を結成、翌年に民芸会館がオープンしました。この頃、ポロトコタンには100万人を超える観光客があり、特に人気の土産品である木彫り作品は、未完成のものでも売れるような様相を呈していました。

このような中、観光客からの期待に応えるため真摯に技術の向上や創意工夫に取り組む事業者もいました。北海道アイヌ民芸品コンクールの伝統工芸部門において入賞者が誕生するなど伝統的技術の伝承に寄与する側面も有していました。



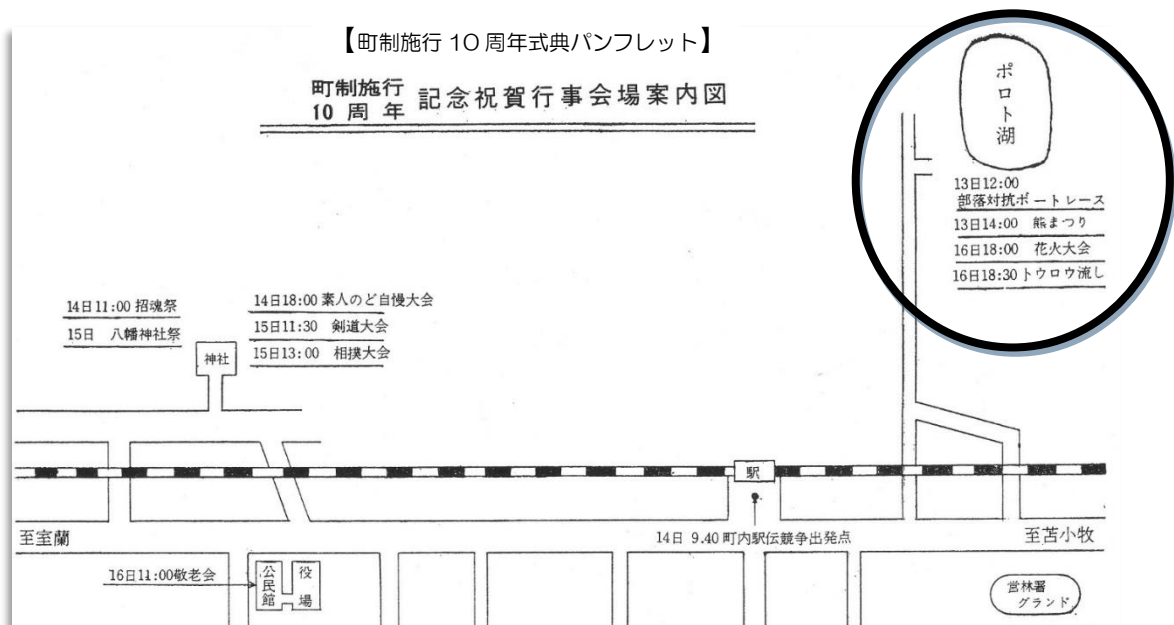
【白老の木彫りグマ職人の先駆者、細越春松の作品（上）、湖畔に移転した頃の民芸品店（中）、民芸会館「ミンタラ」の正面写真（下）】

5 ポロト湖と町政～式典の舞台として～

町制施行 10 周年式典とポロトの観光地化

昭和 39 年 9 月 12 日から 16 日にかけて、白老町は町制施行 10 周年の記念式典を挙行。その際にポロト湖畔が初めて町の式典会場として登場しました。

これを皮切りにポロト湖周辺はイベント会場として活用されるようになります。湖畔の観光施設整備も連動した変化なのでしょう。当時の新聞の表現を借りるなら、「地図にも載らなかった無名の沼が観光業を主眼とした新しい白老の重要な一翼を担う」こととなったのです。



湖畔で行なわれた 10 周年式典関連の催し

ポロト湖畔では、ボートレース、「熊まつり」、花火大会、燈籠流し、消防団員による消防総合演習などが行われました。消防演習は虎杖浜、竹浦、萩野、白老、社台各分団の対抗で、ポンプ操法や放水の練度を競い合いました。また、ボートレースも各地区から代表者が選出され、風船割りや目隠しのまま船を操る競技が含まれています。そして、式典最後を飾るイベントとして計画されたのが燈籠流しです。こちらにもコンクール方式が採られ、一般参加の部と有力

商社団体が「出陳の装置が 3m以上」を条件として競い合う部に分かれていました。

これらのプログラムからは、セレモニーというよりも地域対抗の運動会といった印象を受けます。

一方、熊まつりはこれまでも式典に際して行なわれていました。39 年の式典時には一部の人たちが湖西岸（現ポロトインフォメーションセンター付近）にチセ（茅葺家屋）を構え、観光客などの対応を行なっていました。

こうした経緯から 10 周年式典では、そこで育てられたクマが登場し、模擬的な儀礼を行う計画であったようです。しかし、生憎の雨天に見舞われ、会場は白老小学校体育館へ移されました。



湖畔で行なわれた 20 周年式典関連の催し

20 周年の記念式典は、昭和 49 年 10 月 8 日に挙行されました。10 周年の際とは異なり町主催となったのは式典のみで、その他のイベントは体育月間と連動した協賛事業として実施されました。

ポロト湖畔では 11 日に高齢者を主な参加対象としたウォーキング大会「歩け歩け運動（湖の外周 6 km）」と土俵を特設した「第 2 回子供相撲教室」が開かれています。

前回の式典と比べ、ポロト湖畔を社会教育やレクリエーションの場として活用した点に特徴が表れているのではないのでしょうか。観光、自然の活用、文化伝承の場など、私たちが知る多種多様で多彩なポロトの姿が見えてきた頃かもしれません。

6 ポロト湖と博物館～文化伝承の拠点へ～

博物館施設の移り変わり

アイヌ民族に関する資料館を建設する構想は、もともとは大正時代にまで遡ります。もっとも当時の論調は「遺風を永久に保存するための考古参考館」であり、アイヌ文化を過去のものとして位置付けていました。

昭和 40 年頃から文化の継承保護の機運が高まり、42 年 6 月に町立の白老民俗資料館が誕生します。そして 59 年 4 月の財団法人アイヌ民族博物館、2020 年の国立アイヌ民族博物館建設へと繋がりました。先祖の教えを伝え残したいと願う古老たちが、踊りや文化解説などの実演を通して、学術的な空間を存続させてきたのです。

白老民俗資料館の頃

民俗資料館の建設地には、チセ（茅葺家屋）、プ（茅葺倉庫）、ヘペレセツ（クマ檻）などが先に復元公開されており、野外博物館の様相も見せていました。その後は財団法人白老民族文化伝承保存財団が核となり、組織的な伝承が展開されていきます。

この頃に活躍した人物の 1 人が、若い頃から文芸活動や言論活動を精力的に行ない、晩年は初代館長を担った森竹竹市（明治 35 年～昭和 51 年）です。森竹は積極的に地元の古老を訪ね、アイヌの風習の聞きとりや各家庭に伝わる祭具や日用品などの収集に精力を注ぎました。こうして集められた民具が、資料館の展示品となっていたのです。森竹の他にもアイヌ文化を伝え残し、理解を促そうと活躍した数多くの素晴らしい伝承者がいました。



【ポロトコタンの来場者と歩く森竹竹市。奥に見える建物が民俗資料館】

アイヌ民族博物館の頃

昭和 56 年、元北海道大学教授 児玉作左衛門が収集したアイヌ民族の有形民俗資料「児玉コレクション」3,000 点が寄託され、従来から検討されていた新博物館を建設する構想が加速しました。そして世界で唯一「アイヌ民族」を館名に掲げ、アイヌ民族自らが経営する博物館の建設が実現しました。



【アイヌ民族博物館落成式の様子】

民俗資料館の頃から続けられてきた普及・伝承活動により、国や町から指定を受けた有形無形の文化財を数多く所有。また、フィンランド、スウェーデン、カナダ、台湾などの少数・先住・原住民族の資料を公開する博物館施設とも積極的な交流を重ねてきました。

文化財名	指定区分	指定年月日	概要
アイヌ古式舞踊	【国】 重要無形 民俗文化財	昭和 59 年 1 月 21 日	・舞踊をはじめとした伝統芸能。クマ送りの踊りやクジラの踊りのほか、座り唄や杵つき唄も含まれる
ルウンペ	【国】 有形 民俗文化財	昭和 61 年 4 月 4 日	・木綿の衣服に絹やメリンスなどの古布を細かく切って貼付け、刺しゅうを施した衣服。噴火湾周辺および白老にのみ伝承され、制作年代は江戸時代末期まで遡る
アイヌ生活用具 コレクション (児玉コレクション)	【町】 有形 民俗文化財	平成 12 年 3 月 31 日	・昭和 4 年から 40 年にかけて収集された膨大な民具、衣服、装飾品の資料群。北海道から樺太まで収集地域が幅広いことも特徴
伝統文化継承者	【町】 無形 民俗文化財	平成 19 年 3 月 8 日	・町が認定した 23 名の継承者のうち、14 名が踊り、工芸、刺しゅう、料理、言語などの各伝承分野において、アイヌ民族博物館と深く関係していた

民族共生象徴空間「ウポイ」の開設に向けて

平成9年、「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」が施行。10年後の19年、国連総会では「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が、翌年には衆参両院では「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」を採択。



【イオル事業によるポロト湖畔の植林帯】

この間の道内では、伝統的生活空間「イオル」の再生に向けた取り組みが各地で展開されてきました。この政策におけるイオルとは、アイヌ民族の伝承活動に不可欠な自然素材を提供でき、伝承、教育、理解の促進を図るための機能を備えたフィールドを意味します。

白老町は従来の取り組みや自然環境などの条件が評価され、中核的な役割を担う地域となりました。町内各地に設定されたイオルのうち、ポロト湖畔では天然に近い植生を標本的に再生するゾーンとして、有用植物や薬草類を栽培していました。

21年、「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」により、「民族共生の象徴となる空間の整備」が主要施策として位置付けられます。白老町が建設地と定められたのは26年6月。国立アイヌ民族博物館と国立民族共生公園はアイヌ文化復興・発展の拠点として、また、先住民族の尊厳を尊重し差別のない多様で豊かな文化を持つ活力ある社会を築いていく象徴として、来たる歴史的な瞬間への準備が着々と進められています。

差別や偏見などに晒されながらも、文化を保存・伝承・啓発してきた先達の想いは、現在も確かに息づいています。そして、アイヌ文化をはじめ多様な人々の足跡が刻まれてきたポロト湖畔を舞台に、世界に発信される共生社会の拠点という新たな姿が、今まさに誕生しようとしているのです。

7 ポロト湖をめぐる主な出来事

縄文早期	12000~7000年前		<ul style="list-style-type: none"> ・温暖化により海水面が現在より5m高く、ポロト湖の原形となる潟湖が形成
縄文前期	7000~5500年前		<ul style="list-style-type: none"> ・「ポロト1遺跡」「ポロト2遺跡」形成
縄文中期	5500~4500年前		<ul style="list-style-type: none"> ・気候が寒冷化に向い海面が後退をはじめ。 「ポロト遺跡」形成
縄文後期	4500~3300年前		<ul style="list-style-type: none"> ・気候が現在とほぼ同じとなり、海岸線も現在の位置に近くなる ・「ポロト3遺跡」「ポロト4遺跡」形成
明治 34	(1901)年	月	<ul style="list-style-type: none"> ・ポロト湖で天然氷の採氷開始。白老駅などから各地へ出荷
大正 10	(1921)年	2	<ul style="list-style-type: none"> ・ポロト湖の採氷を目的に白老凍氷株式会社発足
昭和 27	(1952)年	6	<ul style="list-style-type: none"> ・白老漁業協同組合がポロト湖のワカサギ漁に関する内水面協同漁業権を取得
昭和 36	(1961)年	3	<ul style="list-style-type: none"> ・ポロト観光株式会社が発足し、宿泊施設「ポロト荘」を建設
昭和 39	(1964)年	9	<ul style="list-style-type: none"> ・町制施行 10周年式典挙行。ポロト湖畔でボートレース、熊まつり、花火大会、灯籠流しなどを開催
昭和 40	(1965)年	5	<ul style="list-style-type: none"> ・観光客増加に伴い観光業などを営む施設が湖畔南側に完成
昭和 42	(1967)年	3	<ul style="list-style-type: none"> ・鳥獣保護区指定
		6	<ul style="list-style-type: none"> ・町立白老民俗資料館開館
昭和 43	(1968)年	7	<ul style="list-style-type: none"> ・白老興業株式会社が「ドライブインレストラン・ポロト」を新設
		11	<ul style="list-style-type: none"> ・湖畔で温泉が湧出
昭和 44	(1969)年	10	<ul style="list-style-type: none"> ・白老温泉ホテル「ポロト」が開業
昭和 50	(1975)年	8	<ul style="list-style-type: none"> ・民芸会館が開館。平成12年10月「ミンタラ」と改称
		9	<ul style="list-style-type: none"> ・蒸気機関車「SL D51-333号」を国鉄より借受け湖畔に設置。公募により愛称を「SLポロト号」に決定
昭和 51	(1976)年	7	<ul style="list-style-type: none"> ・林野庁がポロト湖と後背地の森 395.65ha を「ポロト自然休養林」に指定。町では「自然に包まれた自然に親しみながら人々が休養できる森林」整備の一環として湖畔を巡るサイクリングロードを整備
昭和 52	(1977)年	2	<ul style="list-style-type: none"> ・ポロト湖畔を会場に「白老どさんこ冬まつり」を初開催
昭和 54	(1979)年	3	<ul style="list-style-type: none"> ・竹浦にあったサカタランドよりコタンコロクル像を移転
		4	<ul style="list-style-type: none"> ・白老観光商業組合が民芸会館前にトーテムポールを設置
		3	<ul style="list-style-type: none"> ・保安林指定
昭和 57	(1982)年	10	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ都市宣言によりポロト湖外周をルートとした町民マラソン大会を開催
		3	<ul style="list-style-type: none"> ・「白老屋根のない博物館アイテム」として、ポロト自然休養林とアイヌ民族博物館にサインを設置
平成 6	(1994)年	9	<ul style="list-style-type: none"> ・町制施行 40周年記念事業として、ポロトコタンをメイン会場に先住民国際フェスティバルを開催
平成 8	(1996)年	1	<ul style="list-style-type: none"> ・白老ふるさとアルバムづくりの会制作のビデオ作品「白老ポロトコタン」が第4回北海道映像作品コンクールで入選

平成 12 (2000) 年	3	・アイヌ民族博物館所有の「児玉コレクション」を町有形民俗文化財に指定
	9	・第 13 回チェブ祭開催。会場を白老港からポロトコタンへ移設
平成 14 (2002) 年	3	・白老町が伝統的生活空間「イオル」の中核イオルに決定 ・ポロトの森が日本遊歩百選に選出
	8	・シリカッ(メカジキ)の送り儀礼を 17 年ぶりに再現
平成 23 (2011) 年	2	・天然記念物北海道犬保存会が、ポロト湖畔で東胆振では 23 年振りとなる展覧会を開催。182 頭出展
		・白老駅からポロト湖を結ぶ全長 283m の遊歩道が完成
平成 25 (2013) 年	10	・ポーランドのアイヌ文化研究者プロニスワフ・ピウスツキの胸像をアイヌ民族博物館園内に設置
平成 26 (2014) 年	6	・民族共生象徴空間の整備地が白老町ポロト湖畔に決定
	10	・幕末の蝦夷地を調査した松浦武四郎生誕の地、三重県松阪市の松浦武四郎記念館とアイヌ民族博物館が姉妹博物館提携。博物館園内に記念碑を設置
平成 28 (2016) 年	5	・第 8 回アイヌ政策推進会議において、国立博物館などの名称を正式決定
平成 29 (2017) 年	3	・民族共生象徴空間整備に伴いポロト温泉閉館
平成 30 (2018) 年	3	・アイヌ民族博物館閉館。コタンコロクル像解体撤去。博物館はアイヌ文化振興・研究推進機構と合併し「公益財団法人アイヌ民族文化財団」へ名称変更
	12	・民族共生象徴空間および国立アイヌ民族博物館のロゴマーク決定 ・民族共生象徴空間の愛称が「ウポバイ」に決定
(2020) 年	4	・民族共生象徴空間オープン

【涙でできた二つの湖】～ポロト湖の伝説より～

昔、白老コタンに仲睦まじい若夫婦と男の子の三人家族が住んでいた。

ある日、夫は一人で狩りに出かけたが、夜になっても帰らず、コタン総出の山狩りとなった。

捜索は何週間も続けられたが、行方はつかめず、やがて打ち切りとなった。

しかし、母子は諦めることができず、毎日丘の上に登り夫の帰りを待ち続けたが、ある晩、ひときわ高い母子の泣き声がコタンに響き、そして途絶えた。

人々は闇の中、丘に向ったが二人の姿はなく、やがて夜が明け水を湛えた二つの湖を発見した。大きな湖(ポロト)は妻の涙で、小さな湖(ポント)は子供の涙でできたものだった。

資料提供 (一社)白老観光協会

書籍名 ふるさと再発見シリーズ3「ポロト湖物語」

編集 郷土資料デジタルアーカイブ化等事業編集委員会

発行 白老町教育委員会生涯学習課〔仙台藩白老元陣屋資料館〕

TEL:0144-85-2666 E-mail:jinya@town.shiraoi.hokkaido.jp